



東北医科薬科大学医学部医化学教室より 仙台から新たな炎症・アレルギー研究の 成果を発信

森口 尚

2016年4月に全国で81番目の医学部として東北医科薬科大学医学部が仙台に新設され、医化学教室という名前の新しい研究室を立ち上げる機会に恵まれました。前身である東北薬科大学の歴史は古く今年で80周年になりますが、私が着任した医学部の開設時はキャンパス建設中であったため、オフィスにデスクと電話があるだけでラボスペースも研究備品もありませんでした。

私自身は筑波大学医学専門学群を卒業後3年間の整形外科臨床研修を経て、当時筑波大学先端学際領域研究センターにいらした山本雅之教授のラボで大学院生として鍛えていただき、研究者への道を歩み始めました。その後、ミシガン大学のDr. James Doug Engelのラボで、現在のテーマである転写制御因子とくにGATA転写因子に関する研究を始めました。帰国して山本雅之教授の研究室（東北大学大学院医学系研究科医化学分野）に戻り9年間を過ごした後、現職に異動となりました。初めて私立大学での教育・研究を行うこととなり、国立大学との違いを痛感しておりましたが、徐々に新しい研究スペースやマウス飼育設備が整備され、準備を進めてきた研究プロジェクトから面白い結果が得られるようになってきました。

我々の研究室では転写制御因子であるGATA因子群の機能に焦点を当て、炎症・アレルギーや感染防御のために重要なプロセスの制御機構解明を目標に解析を進めています。様々な炎症・感染刺激に応答しGATA因子が活性化するメカニズムや、炎症誘導・感染防御に関わるGATA因子を介した分子機構を明らかにし、その破綻によって起こる疾患の原因解明を目指しています。遺伝子改変マウスと独自に開発したインビボイメージングによる炎症モニタリングシステムを用いて、複数のアプローチによるGATA因子を標的として創薬ターゲット開発に取り組んでいます。本学は東北地方の医療に貢献する人材を育成することをミッションとして掲げていますが、common diseaseの病態解明・治療法開発の基盤となる研究を通して、このミッションにコミットしていきたいと考えています。現在、ス



図1 当教室スタッフ（センターが筆者）



図2 研究室から見下ろす七北田川と大学付属病院新棟

タッフは私を含めて3人で、研究室配属となる医学部4年次学生が唯一の学生戦力です（図1）。大学院開設に向け、学内的な準備を進めているところです。

仙台は、夏は涼しく冬も積雪は少なく、都会と史跡と自然が調和していて暮らしやすい街です（図2）。マラソンが趣味の私ですが、仙台は広瀬川や七北田川といった河川敷にランニングコースが整備され、蔵王などの山域も近く最高のトレーニング環境で、今年も自己ベストを更新しました。この街での暮らしも東北大学時代から数えて12年となり、住み慣れた仙台で研究を継続できることに幸福を感じています。マラソンだけでなく研究でも自己ベストを出せるように、精進していきたいと思っています。